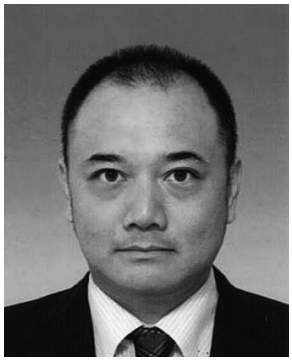
発掘された琉球墓

宮城弘樹（沖縄国際大学南島文化研究所所員）
【みやぎ　ひろき】



沖縄国際大学総合文化学部社会文化学科准教授。1975 年沖縄県名護市出身。専門は考古学。1997 年今帰仁村教育委員会、2012 年名護市教育委員会を経て、2015 年から現職。

主に琉球列島の先史時代からグスク時代の社会史に関心をもって研究を行う。現在は近世琉球の発掘墓資料についての調査研究を行う。主な著書に、「中世の銭と琉球王国」『新沖縄県史各論編　古琉球』（沖縄県教育委員会、2010 年）などがある。

琉球文化を特徴付けるお墓は「あの世の家」などと俗称されて、琉球ではしばしば亀甲墓に代表されるような立派なお墓を建造します。沖縄に旅行に来られた方であれば、大きなお墓に目を奪われるわけですけれども、1853 年、今から約 170 年前にペリー一行も絵図に残しております。しかし、近代は別にしても、このような大型の亀甲墓を造ることが許されたのは、基本的に王族や士族の家柄で墓そのものも身分を表すものでした。

1990 年代頃から都市部の開発に伴って、数多くのお墓が発掘調査されています。そこで私の報告では、考古学の立場から発掘されたお墓をひもとくと、どのようなことが分かるのかを少しお話しさせていただきたいと思います。

琉球の墓の特徴は横穴形式で一次葬を行うシルヒラシで死者を一定期間安置し、軟部組織がなくなり、骨だけになった後に洗骨して清めます。【図１】は浦添の前田経塚古墓群で発掘されたお墓の内部の様子です。洗骨された骨は、厨子と呼ばれる専用の蔵骨器に納められます。厨子は家形と甕形があって、独特の意匠が琉球の人々の死生観を表しているといわれております。そして、厨子には、しばしば死者の名前や死亡や洗骨年を書いた銘書というものが記されます。墓室正面、および左右棚に設けられた棚と呼ばれるシルヒラシよりも一段高くなった場所に厨子を安置します。このように祖先を仏壇に祀るように棚の上に置きます。

浦添市前田経塚近世墓群：墓室の様子（手前が墓口）

図１　発掘された浦添市のお墓

図にありますように、このお墓は洗骨されずに１次葬のまま、ご遺体がシルヒラシに安置され発見された事例になります。

本日の市民講座は『葬墓制からみる近世琉球』というタイトルでご案内させていただきました。そもそも葬墓制資料というものが、どういう資料を指しているのか、トップバッターの私から説明させていただきます。葬墓制は葬制と墓制という二つの言葉からなっております。遺体の処理や葬送に関わる習俗を、ここではひっくるめて葬制。洗骨は葬制。ご遺体を安置したお墓、亀甲墓などは墓制となります。これをひっくるめて葬墓制資料と仮に名前を付けました。具体的どういうものがあるかというと、お墓や副葬品、出土人骨などがあって、それぞれの物質文化に歴史学や民俗学、

考古学がアプローチしてきたという研究の歴史があります。

お墓の関心は、何も宮城が初めて関心を向けたといことではありません。これまでにもたくさんの研究会が開催され研究が行われてきました。このため何も宮城があらためて、この分野を研究するといっても新しい話はないかもしれませんが、次の二つの理由からプロジェクトを立ち上げました。

第１に考古学の調査では、古墳やピラミッドに代表されるようなお墓は、当時の素晴らしい装飾品が発見される、通常の集落遺跡とはまた異なる保存状態、良好な状態で当時の資料にアクセスできる利点があります。地下に埋もれたタイムカプセルという表現をする場合がよくございますが、人々の生前の姿を知る考古学上は良好な資料に恵まれることがあります。そして、何より沖縄においては近世といえども戦災で王国時代の資料が失われてしまったところに、お墓の中にあったがために被災を免れた貴重な同時代資料が得られるということで注目したわけであります。

二つ目の理由は、文化財に指定されているお墓は保護されているものが多いんですけれども、実際には民衆の、あるいは忘れ去られてしまって無縁化した古墓などが各地に残されていて、このような琉球王国時代の遺跡が今、急速に姿を消しつつあります。都市の開発、あるいは継承者の不足、高齢化によって、どんどん墓が失われていっている現状があります。少子高齢化、土地の有効活用を考えれば現実的な対応であり、これを批判するものではありませんが、その反面、そこに遺される歴史情報が失われてしまうことは、文化的な損失だというふうに考え、このプロジェクトを急ぐべきだと考えたわけです。

それでは、葬墓制資料から具体的にどんな歴史が描けるのかということを考え始めたのが、2016年からで、少しずつ研究会、勉強会を重ねながら現在に至っております。2021年度から、今度はもう少しだけプロジェクトの規模を大きくして、歴史学の先生や民俗学、あるいは自然人類学、文化財科学などの先生方と一緒になって葬墓制資料を少し集中的に見ていこうということで、今、まさに今年から科学研究費というのをいただきまして、事業を進めているところでございます。

さて、沖縄の歴史的な墳墓として現在知られるのが、どれぐらい数があるのかというと、2013年に沖縄考古学会が開催した近世墓集成という報告によれば、沖縄本島に約459の遺跡があるというふうに報告されております。450基ということではなくて一つの遺跡が１基の墓というところもあれば、一つの遺跡からたくさんのお墓が見つかっているという例もあります。

これまで具体的にどういうような歴史を復元してきたかというと、考古学研究によって例えば焼き物の歴史であったり、発見された厨子に記載された銘書や出土人骨を通して家系図を復元したり、歴史上よく知られた人物のお墓が調査されたりということが行われました。このような個別研究も重要で、もちろんこれを基礎にしているわけですけれども、考古学研究者としては、この発見された事実を束ねて全体を通して何か新しい事実に迫れないかということを考えるようになりました。ここでは、複数の資料を横断し、これまでの発掘調査報告書のデータを使って、私の発表では三つの事象に焦点を絞って紹介していきたいと思っております。

一つ目の事象は、琉球王国時代の一部近代も含まれるわけですが、これまで報告されている出土厨子甕、あるいは博物館収蔵の厨子に書かれている銘書を全部集めてみる、集めた銘書の死去年の分かる文字資料をピックアップしてみようということを企画しました。発掘調査報告書から銘書が4,424件、このうち年号が書かれているものが2,641点ありました。年号が記載されて読めるもの、年号が類推されるものも含みます。

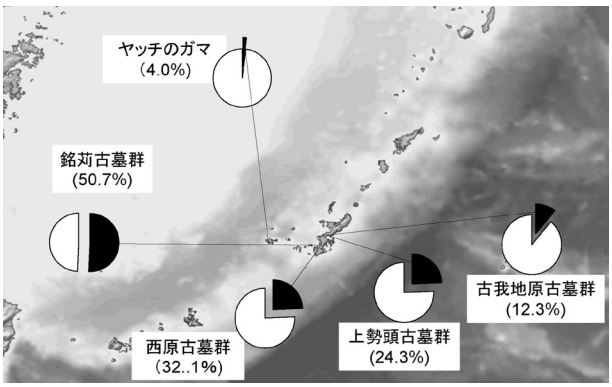


図２　主なお墓の調査における銘書の出現率

この集成が沖縄島全体をカバーするかというとそうではなくて、資料には偏りがあることもお断りしたいと思います。【図２】はそれぞれの墓から発見された厨子全体のうちのどのくらいの厨子に銘書が書かれているかをグラフにしたものになります。那覇市では銘苅古墓群では例えば50％ほどの厨子には銘書が書かれるのに対し、首里に近い西原だと32％で、離れてうるま市に所在する古我地原だと10％、久米島のほうになると４％というような形で、中央、首里・那覇に近いところの士族層では文字をたくさん使い、地方に行くとその数が減じていくことも読み取れるかと思います。このため、紀年銘を扱うときには、やはり士族層を中心とした情報であることを注意する必要があります。

この集成によって年代が特定できる紀年銘厨子は2,639件あって、これを対象に10年ごとに紀年銘厨子の数量的な変化について調べました。その結果、1609年以前の厨子はほとんどが玉御殿のもので、1609年から1720年代までは件数は大変少ない。また、新しいほうでは沖縄戦後の資料が大きく減じていることが分かりますが、これは沖縄戦後に銘書を書かなくなったということではなくて、文化財の保護対象として、埋蔵文化財の記録保存の対象となっているか、なっていないのかという違いによって資料数が減じているためと考えられます。

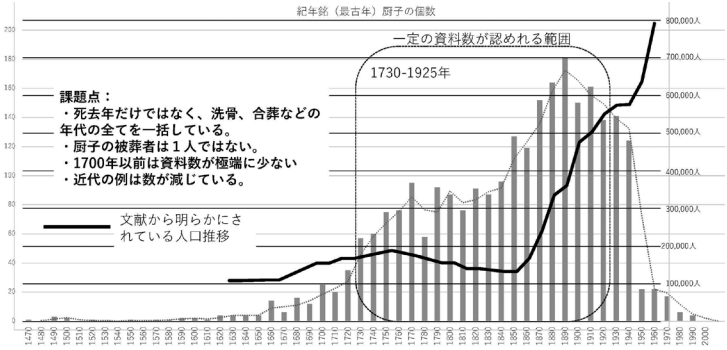
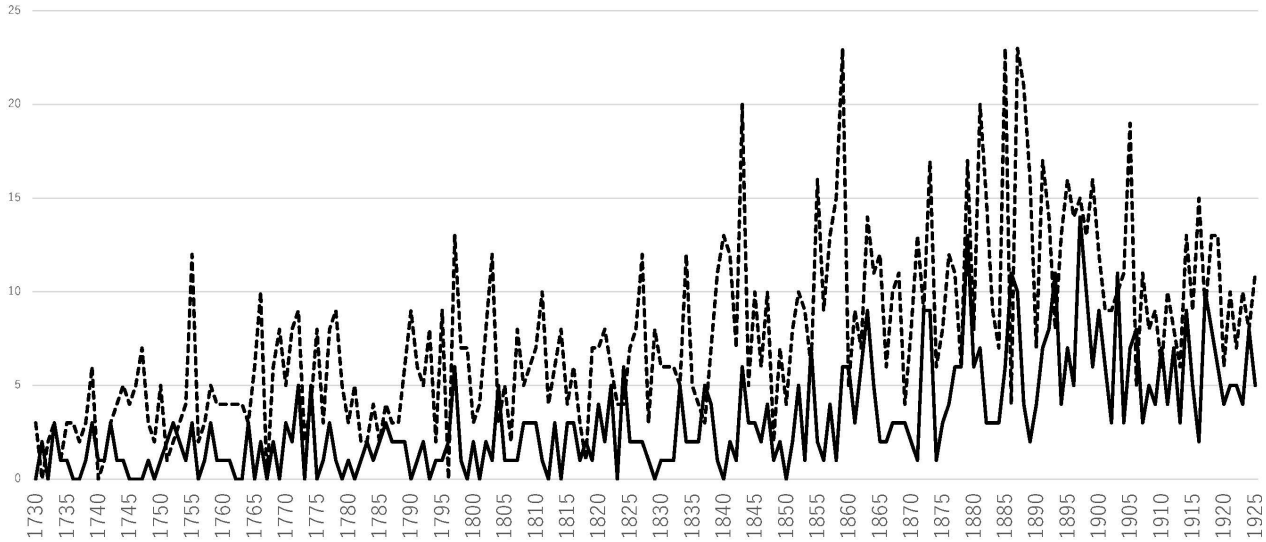


図３　（最古）紀年銘厨子（個数）
10年単位のグラフ（n=2637基）（人口推移）

一定の資料が認められる範囲は1730年から1925年になります。この数がある程度みられる銘書をピックアップし数的な変化を読み込むことで、近世の人口にアプローチできないかと考えました。【図３】は折れ線グラフが人口、文書、文献から明らかにされている人口の推移です。

紀年銘が書かれているのが2,000件ぐらいあるにもかかわらず、死去年が書かれているのはわずか610件しかありません。では、多くの紀年銘は何を書いているかというと洗骨年になるわけです。死去、洗骨が書いているものあります。

今度は死去年と洗骨年を【図４】のグラフにしました。１年ごとの死者数の増減を実線で洗骨年の件数を破線の折れ線グラフで示しております。左側の1730年から右側の1925年まで死者数や洗骨年に増減があって、山と谷があるのが分かるかと思います。これは、あくまでも人口ではなくて



実線：死去
破線：洗骨

図４　１年単位の死去・洗骨年件数

死者数の推移になります。ただし、破線は洗骨年が1・3・5年後に洗骨されますので、少し誤差があります。それでも、それなりの相関が見えるのではないかなと思います。

ここでは、先ほどのグラフの山と谷を考える上で、歴史人口学で使われる概念の一つ、死亡クライシスという概念を紹介したいと思います。死亡クライシスは平常な死亡者数から異常な増加、あるいは平常年の死亡者数から著しい上昇が観察される局面のことを言います。簡単に言い換えると、いつもの年よりも亡くなった方の多い年と考えていただければと思います。これは、基準年が必要なので平常年を該当の年前後5年としました。そこから、平均死者数で割ったものを死亡者指数として平常の死者数よりも高い率を示す年を見ていきたいと思います。

【図5】のグラフは1年単位で銘書記載の死去年件数と文献記載の飢饉災害の記録を重ねたグラフになります。1730年から1924年と近世と近代のものを含みますが、近代のものについては次に紹介したいと思います。ここでは近世に限って説明いたします。死亡クライシスは、通常、飢饉や災害といった人口維持に対して大きなストレスが生じたときに起こると考えられますので、多くの記録などに記載されている飢饉災害年と整合的なところと、そうでないところをピックアップしました。二重丸（◎）が厨子記載の銘書の死去数と文献記載の死亡クライシスが調和的なところで、これが8件ありました。文献で飢饉があるときの厨子甕に死亡が記載されている件数が全体では増えていることが確認できました。その一方、飢饉については文献に記載があるけれども、銘書のほうでは対応しないというものが3件ありました。

文献を分母として、どれぐらいの率で当たっているかというと70%が整合的ということがいえます。一方で文献にはないけども厨子甕の銘書を見ると、どうもこの年は死亡クライシスと言える年が確認されています。それが10件あり、三角（△）で示したところになります。1739年から1764年までは、きっと文献が少ないので記録類が乏しく、もしかしたらこの年に飢饉や災害があったようなこともあるのではないかと考えました。

【図6】は近代のスライドになります。近代は棒グラフと破線の折れ線グラフが厨子甕記載の死去数になります。実線の折れ線グラフが近代の統計データで、右に人数が記載されております。二つのデータが調和的な部分を網掛けして示しました。網掛け部分は全体の70%ほどで、逆に近代統計のデータは死者数が山になっているにもかかわらず、厨子の方はそうではないというところが3割ほどありました。これは、データ数がどうしても少ないために生じたと考えました。例えば、1894年でみていくと、統計上の死者数は8,295人を数えますが、この年を死去年とする紀年銘厨子は、件数は

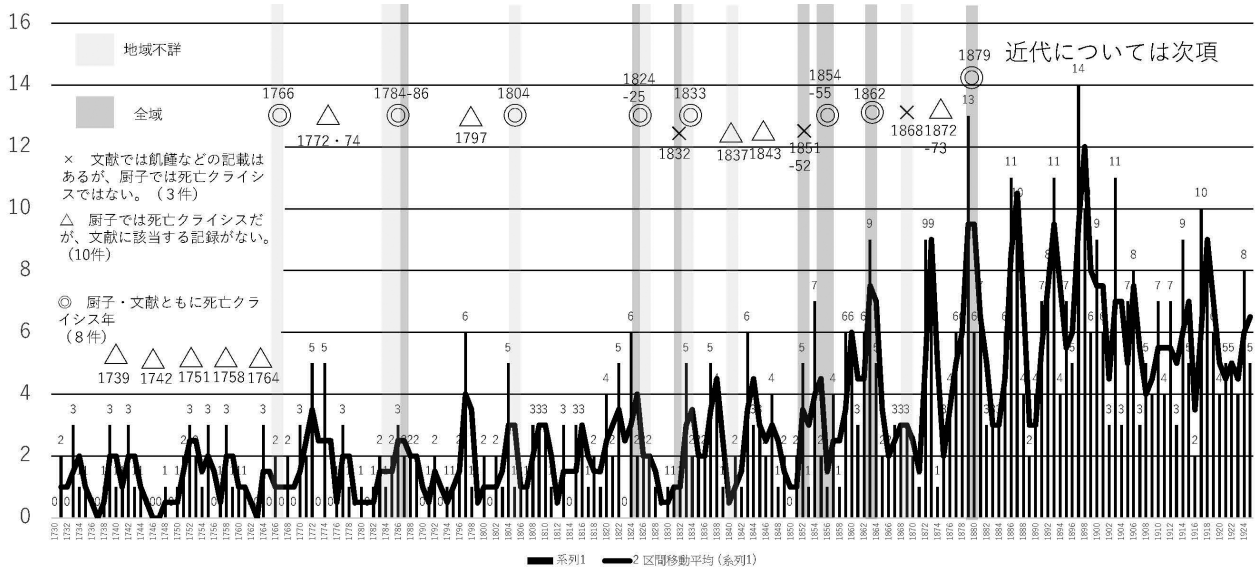


図5　1年単位の死去年件数と文献記載の飢饉等災害記録（暫定番）

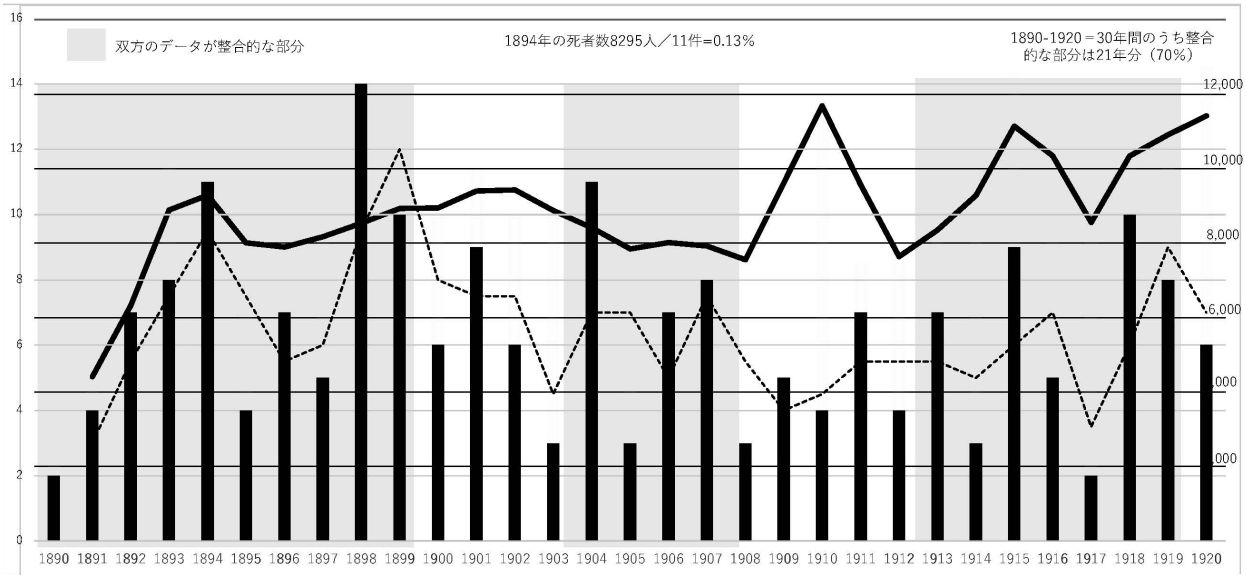


図６　厨子記載年単位の死去年件数と近代統計資料の死者数（暫定版）

わずかに 11 件です。8000 分の 11 のサンプルで統計的に処理するには、必ずしも十分なデータではないかと思います。

以上、少なくない課題もあります。しかし、これまで前近代にさかのぼって歴史人口学の検討を行うということは、琉球史においては文献史料が得られないという現状があります。総人口の推移そのものを厨子甕から検討するということは、やはり容易ではありませんが、遺跡から出土する銘書や人骨などを調べることで、死者数の推移や人口の構成、あるいは人口移動といったことを検討する潜在的な価値を持っているということを、厨子甕の銘書から示すことができると考えました。

二つ目は、琉球人の身長について考えていきたいと思います。これまで何度か触れましたが、琉球の葬送の特徴の一つは洗骨であります。骨を丁寧に清め専用の臓骨器にこれを納めます。日本本州は、琉球の葬制とは異なり土葬、あるいは火葬で、骨は後世に残りにくいような納骨方法がとられます。これらの地域に比べ、比較的良好な状態で骨が保存されるという資料的特性があります。

【図７】はヤッチのガマ遺跡の発掘調査で記録されたもので、厨子甕の中に納められた夫婦で合葬された人骨の例です。遺跡からはこのように骨が納骨され、きれいな状態で保存されています。骨が残されていると、一部の骨から身長を推定することができます。大腿骨の長さを使って自然人類学の研究手法に基づいて、いくつかの算出方法が提示されておりまして、国内外で身長が分かっているデータを計測し、推定式が提示されております。代表的な計算式がピアソン式というものです。例えば、大腿骨が 42 センチの場合、男性であれば 160.27cm というような形で求めることができます。

既刊の報告書から身長推定が行われたものを集めると、男性が 121 例、女性が 88 例ありました。これは、ほぼ近世琉球の人々で時代や地域を総じて平均すると、男性であれば 157.9cm、女性であれば 146.12cm というように推定平均身長を算出しました。上記は近世琉球人全体ですが、これを例えば久米島の人はとか、那覇の人は、あるいは近

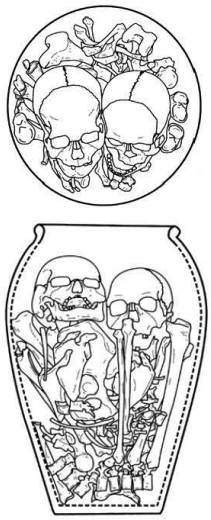
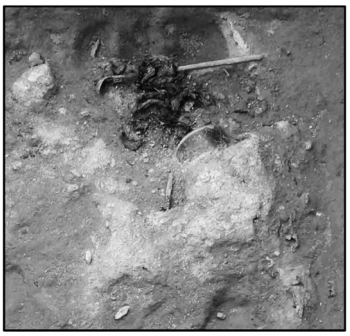


図７　ヤッチのガマの厨子甕内の人骨
（原図：土肥直美）

図８　浦添市前田経塚古墓群



浦添市内の発掘調査で出土した結髪
（浦添市教育委員会提供）

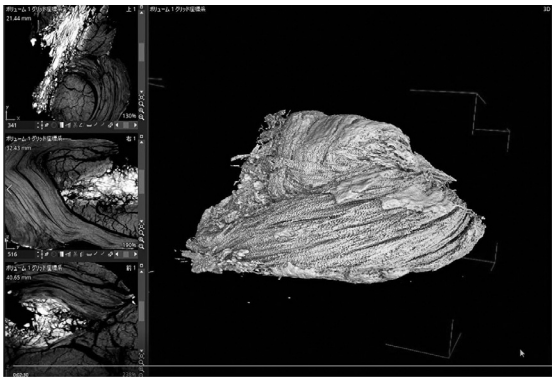


図９　Ｘ線 CT スキャンによる分析

世や近代ではという形でも調べることもできます。ここでは、近世琉球の身長を、おおざっぱに紹介しました。近世琉球の人々に、われわれはタイムマシンでもない限り会うことはできないわけですけれども、こうしてお墓の出土人骨を通して琉球人の姿を、子孫の私たちは具体的に知ることができます。

最後にユニークな出土品から王国時代の人々の所作や姿に近づけるような研究を紹介したいと思います。発掘調査で出土するものは、基本的に腐りにくいものであります。遺跡からは焼物が出土して考古学では、これを熱心に研究します。土の中では本来、例えば縄文時代の遺跡で木製品なんていうのがしばしば低湿地遺跡から出土することがあります。このような資料はかなり特異な環境でない限り、ほとんど腐ってなくなってしまいます。王国時代の出土品に関してもそうです。ここで紹介するのは、腐敗を免れた出土品の事例です。【図８】は浦添市で発掘されたもので、図の下が足、上が頭というのが分かるかと思います。図の枠で囲まれ部分の横にあるのがかんざしで、図８の右は髪の毛の出土状況になります。

琉球の髪結いの文化は、現代では芸能の世界でこれを見ることができます。また、近世にさかのぼる髪の結い方は絵図資料などでも見ることができます。しかし絵図から分かるのは実は外観だけで、どのような行程で結われていたのかについては、十分な情報がないというのが現状です。このような琉髪とも呼ばれるような、琉球独特の結髪文化、髪結い文化について知ることができるのが出土結髪になります。

前田経塚大名地区からは洗骨前の１次葬に【図８】に見るような形で、頭頂部に毛束が発見されていました。これと併せて全部で５例の髪毛資料、出土結髪が確認されています。これを結髪、からじ結いの伝承者、研究者の方にご覧いただき、復元することを企画しました。まだまだ研究途上の作業の一部です。実際に復元することで出土品の理解を深めていこうということを行いました。

さらに出土品を分析するにあたっては、外観からの形態的な特徴を見て分析する以外に、資料をＸ線 CT スキャンにかけて、断面も観察できるように資料化を行いました。【図９】は結った髪の 3D 画像になります。3D 画像なので回転させたり、断面を切ったりして観察をしていくことで髪の流れ、真っすぐ流れているように見えるところで、実はうねりがあって、そのうねりは髪の毛を一度束ねた後、ひっくり返したり、ねじったりということをやっているということを明らかにすることができます。このような所作の復元においては、実物資料がアーカイブになるという点で大変貴重な資料になるということが言えると考えています。

２点の結髪資料を紹介します。【図 10】は、那覇市が所蔵する資料で那覇市の前田経塚古墓群首里大名地区 49 号墓の墓庭の浅く掘り込んだ穴から発見された髪の毛になります。この資料は、近世というよりは近代のものかもしれないのですが、少なくとも戦前であるものは確実な資料になります。この方は、もしかすると王国時代の生まれかもしれません。文化としては、王国時代の文化の流れをくむ髪結いの資料であるといえるかと思います。これに伴うかんざし、および髷の形状から女性であるということが考えられております。また、かんざしは左から右側に向かってまげを貫くということで、

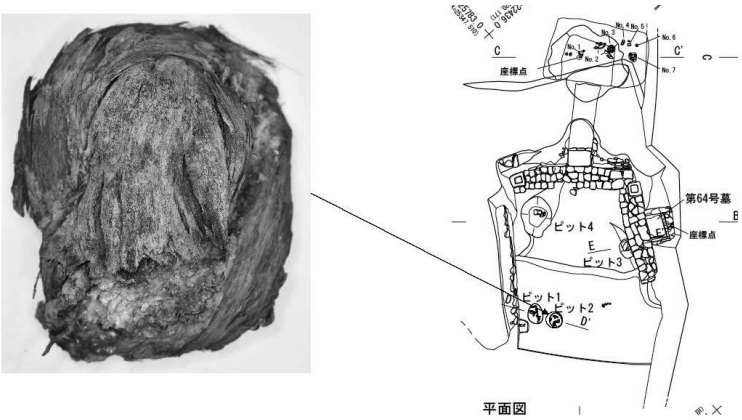


図 10　那覇市前田経塚近世墓群（首里大名地区）

右利きではなくて左利きでかんざしを挿したということが考えられます。この髪結いは返し（ケーシ）結いといわれる束ね方で、髪を頭頂部でくるくると束ね、一回ひっくり返すという形で結われる結方になります。中央のまとめた毛束の毛量が多いことから、相対的に若い女性ではないかということが推定されております。これも髪結いの先生の所見をいただき教えていただきました。

【図 11】は、久米島のヤッチのガマで出土している成人男性の髷、欹髻（カタカシラ）です。文献でよく元服すると、欹髻を結いというような形で登場する、あの欹髻です。髪全体の外側の方が脱落しているため、全体像は不明な部分もありますが、欹髻の様子をよく表すものになります。特に中央のまげの部分が見事なアーチ状を呈しており、結束した髪の毛を中央で束ねて、それを頭頂部から伸ばし、そのときに頭頂部のほうにある根元のところを紐で結びますが、その結った木綿か、裂というか、そういうものが観察できます。この資料、大変、形の良いもので士族、特にアーチ部分に鬢付け油をたっぷりと塗って髪結いをしたものとの所見をいただいています。つまり、大変、整った髪結いをしている男性のもので、百姓のものではなくて身分の高い人の髪の毛ではないかということが考えられます。

このように出土した毛髪は、結いを記憶しているという点で、近世、琉球人の所作が、毛束としてアーカイブされた貴重な資料といえます。さらに、毛髪は別アプローチも可能です。それは炭素窒素安定同位体分析というものです。過去に人骨で行われた安定同位体の食性分析では、ヒヤジョー毛、那覇市の古墓群の人骨から、Ｃ４植物おそらくアワを食していたなど、少し偏った食性の人物というのが発見されています。出土人骨において行われた分析を毛髪でやることで、たとえば毛髪は数カ月の単位での食性の変化を知ることができます。これは、まだ分析を行っていないアプローチではありますけれども、近々、向こう４年間のプロジェクトの中で進めていこうと考えております。

以上、まとめますと以下の三つの事例を紹介しました。

一つ目が、墓の厨子に記載されている銘書を用いた歴史人口学に関するアプローチ。

二つ目が、出土人骨を通して明らかにする身長と出土した者個々の情報をひもとくようなチャレンジ。

三つ目は、出土結髪を用いた分析を通して当時の結髪文化、文化の髪結い文化の所作の復元研究。

最後に琉球王国時代のお墓は、出土品一つ一つももちろん貴重な文化財です。これを丹念に調べ研究することで、これまでに知られてこなかったような新しい歴史事実に迫ることができる可能性があると私は考えております。他にも、ここでは紹介することのできなかった、たくさんの研究があります。冒頭、これまで行われた研究でいくつか紹介しましたが、何より琉球の葬墓制資料がかつてない勢いで、実は数を減らしつつあるという現状があります。このような文化財の喪失が近世琉球の祖先と対話を失うといっても過言ではないと考えております。

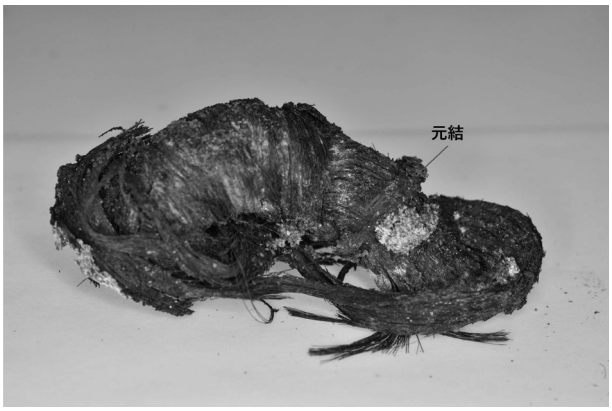


図 11　久米島ヤッチのガマ

第 43 回南島文化市民講座

葬墓制からみる近世琉球社会
－祖先と子孫の対話－（報告集）

発行日　2022（令和４）年２月 28 日
編　集　沖縄国際大学総合研究機構南島文化研究所
発行所　沖縄国際大学総合研究機構南島文化研究所
　　沖縄県宜野湾市宜野湾 2-6-1
　　TEL.098-893-7967
印刷所　有限会社サン印刷
　　沖縄県島尻郡南風原町兼城 577
　　TEL.098-889-3679